

(2) 甲府城の構造

1) 縄張りと曲輪

甲府城は、独立丘陵一条小山を主体として築かれた織豊系城郭であり、立地による分類では平山城として知られている。天守台を最頂部とする階層式城郭であり、縄張りは地形に沿って平場を造り出し、曲輪を形成している。主な曲輪は天守台、本丸、人質曲輪、天守曲輪、帯曲輪、二の丸、稻荷曲輪、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪で、これらは現在も残存している。現在は消失してしまった曲輪として、大半が山梨県庁となっている楽屋曲輪、開発によって市街地化している屋形曲輪、清水曲輪、花畑が挙げられる。上記の曲輪（内城）を取り囲む形で内堀が展開しているが、大半は埋め立てられており、鍛冶曲輪と接する南側のみ水堀の姿を残している。内城の周囲には内郭である武家地が展開し、その外周を二の堀が囲んでいる。さらにその外側に外郭として町人地と、外郭を囲む三の堀が展開している。

甲府城の建造物の多くは、享保 12 年（1727）の大火で焼失しており、近代初期の段階で江戸時代の建造物は全て失われている。

以下、主要な曲輪について詳細を記す。

① 天守台

内城の最上段に位置している。いわゆる穴蔵構造であり、柳沢時代には本丸と繋がる天守穴蔵門が入口に設置され、天守台を取り巻く土塀が絵図に描かれている。築城期の石垣が良好に残存しており、初期の織豊系城郭における野面積みの特徴が随所に確認できる。

② 本丸

内城の中央に位置している。鉄門と銅門の二つの櫓門から、天守曲輪と帯曲輪にそれぞれ繋がっている。曲輪の北東部に本丸櫓が存在するほか、江戸時代中期の柳沢期に本丸書院、毘沙門堂などの建物が建設されている。毘沙門堂は、柳沢氏の大和郡山転封後、華光院（甲府市）に移築され現存しているが、本丸書院及び銅門は享保 12 年（1727）の大火で焼失している。

また、本丸の各所で岩盤が高い位置で確認されており、発掘調査により石切場が確認されたほか、北西部では石垣の裏側の地中石垣が確認されている。

なお、本丸の南西部に大正 6 年（1917）に起工され、大正 11 年（1922）に竣工された謝恩碑の石材搬入路確保のため、本丸櫓台の石垣は解体され、本来は繋がっていなかった人質曲輪が園路となっている。

③ 人質曲輪

内城の中でも最も狭い曲輪である。柳沢時代には人質曲輪門で天守曲輪と繋がっており、南に天守台・西に本丸櫓の土台の石垣によって袋小路になっていた。

大正 6 年（1917）に起工され、大正 11 年（1922）に竣工された謝恩碑の石材搬入路確保のため、曲輪西側の石垣は解体された。

④ 天守曲輪

本丸の東側から南側の外周部に展開し、本丸、人質曲輪、二の丸、稻荷曲輪と繋がっている。天守曲輪門と中の門が存在し、柳沢時代には武具土蔵があった。

⑤ 帯曲輪

本丸を西から南にかけてとりまく帯状の曲輪であり、銅門と鉄門に隣接し、銅門を介して本丸に繋がっていた。絵図では建物は確認出来ないが、発掘調査で内松陰門から銅門へ繋ぐ経路上に、柵門と考えられる柱穴を確認している。

⑥ 二の丸

帯曲輪の西側に位置している。曲輪中央部付近に東西方向の石垣で南北に区画され、江戸期の絵図では、北側を山の井曲輪、南側を台所曲輪と表記するものもある。

北側の山の井曲輪側は、山の井門により帯曲輪と、内松陰門・外松陰門を介し屋形曲輪に繋がっている。天守がない時代、大手門の正面に位置していたのが月見櫓であり、この櫓为天守を代用していたものと考えられる。また、江戸時代初期の絵図にはコの字状の建物が描かれるものもある。月見櫓は享保 12 年（1727）の大火で焼失している。

南側の台所曲輪側には台所門、坂下門を介し天守曲輪、鍛冶曲輪と繋がっているが、目立った建物などは確認できない。

外松陰門や月見櫓台を含む台所曲輪西側の石垣は、昭和初期以降消失し、現在は山梨県庁および主要地方道甲府山梨線（舞鶴通り）となっている。

⑦ 稲荷曲輪

本丸の北側に位置し、数寄屋勝手門、稲荷曲輪門、梅林門、竹林門を介して、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪、屋形曲輪、清水曲輪と繋がっている。築城期から江戸時代初期の絵図には稲荷櫓南から曲輪北東側の石垣上に多門櫓が描かれているが、寛文 4 年（1664）以降、多門櫓は描かれていない。江戸時代中期の柳沢期以降、煙硝蔵、土蔵、番所、庄城稲荷社などの様々な建物が配されるほか、楽只堂年録には曲輪西部に曲輪を東西に仕切る柵列が描かれている。

曲輪西側は明治 30 年代の鉄道建設等により消失、また、稲荷櫓南側の石垣は大正 6 年（1917）に起工され、大正 11 年（1922）に竣工された謝恩碑の石材搬入路確保のために一部解体され、現在では、舞鶴城公園の出入り口となっている。

⑧ 数寄屋曲輪

稲荷曲輪の南側に位置し、数寄屋勝手門を介し稲荷曲輪と、数寄屋表門を介し鍛冶曲輪とそれぞれ繋がっている。寛文 4 年（1664）以降、南端部に三重の数寄屋櫓が、江戸時代中期柳沢期以降、北東部に番所が設置されるほか、北西部における発掘調査により石切場が確認されている。稲荷曲輪から数寄屋曲輪にかけて甲府城の東端には、築城期の石垣が良好に残存している。

⑨ 鍛冶曲輪

内城の南東部に位置し、坂下門を介し二の丸と、稲荷曲輪門を介し稲荷曲輪と、数寄屋表門を介し数寄屋曲輪と、鍛冶曲輪門を介し楽屋曲輪とそれぞれ繋がっている。また、鍛冶曲輪門の東側には食違石垣が設置されているほか、曲輪北東部には、石切場が存在する。曲輪内の建物については、寛文 4 年（1664）以降、米蔵・味噌蔵・番所が、江戸時代後期には勘定所（会所）が設置されている。

⑩ 清水曲輪

内城の北西部、屋形曲輪の北側に位置し、竹林門を介し稲荷曲輪と、屋形曲輪門を介し屋形曲輪と、中仕切門を介し楽屋曲輪と繋がっている。

北側には山手門が配され、内郭へ繋がり、甲府城の3つの出入口の内、山手門虎口が設けられている。江戸時代初期の絵図では山手門には櫓門のみが描かれ、内堀を渡る橋も土橋となっている。山手門虎口では、城内へは土橋を渡り突き当たったところで柳門虎口と同様に右手に矩手に折れ、櫓門を通過する構造となっている。寛文4年(1664)前後の絵図では、櫓門東側の石垣上の遠見番所が描かれる。寛文4年(1664)以降の絵図では櫓門の前面に高麗門が描かれるほか、内堀を掘削して木橋が設置され、木橋と高麗門の間に食違石垣が描かれるようになる。江戸時代中期の柳沢期以降の絵図、遠見番所・食違石垣は撤去される。『楽只堂年録』には、「山之手門 元ハ水之手門」と書かれており、柳沢時代から「山手門」と呼ばれている。甲府勤番士によって書かれた『裏見寒話』には、大手門と山手門が勤番の通行御門となっていることが書かれている。

曲輪内の建物・構造物は、築城期から江戸時代初期までは清水櫓のほか、清水曲輪書院等の建物が描かれる。寛文4年(1664)以降、清水曲輪書院等の建物は減少し、江戸時代中期の柳沢期には、射場・的場・馬場が描かれている。享保12年(1727)の大火により清水曲輪書院等の建物は焼失し、江戸後期には清水櫓と番所、米倉、会所が描かれるのみとなる。このことから清水曲輪が重要視されていた時期は江戸初期であったことが推察される。

現状ではJR中央線や甲府駅などの市街地化により、当時の面影は失われている。

⑪ 屋形曲輪

稲荷曲輪の北西側に位置し、曲輪の東・北・西側外周を内堀が巡る。内堀西側には土橋が配され、屋形曲輪門を介し清水曲輪と繋がっている。また、曲輪南西部では梅林門を介し稲荷曲輪と、外松蔭門を介し二の丸と、屋形門を介し楽屋曲輪門とそれぞれ繋がっている。江戸時代中期以降には内堀北側に木橋が描かれ、清水曲輪と繋がることとなる。番所、金蔵のほか、築城期から江戸時代前期では長屋が絵図上に描かれるが、江戸時代中期の柳沢期には藩主の居館である屋形曲輪書院が描かれており、重要な曲輪の一つとなっていた。

現在では、デパート、ホテル、甲府駅、主要地方道甲府山梨線(舞鶴通り)など、様々な形で開発を受けて市街地化しており、当時の面影は見られない。

⑫ 楽屋曲輪

内城の南西部に位置し、鍛冶曲輪門を介し鍛冶曲輪と、屋形門を介し屋形曲輪と、中仕切門を介し清水曲輪とそれぞれ繋がっている。また、曲輪南東部には大手門、北西部には柳門がそれぞれ配され内郭と繋がり、甲府城の3つの出入口の内、大手門虎口、柳門虎口が設けられている。

江戸時代初期絵図では大手門・柳門ともに櫓門のみが描かれ、内堀を渡る橋も土橋となっている。大手門虎口では、城内へは土橋を渡り突き当たったところで左手に矩手に折れ、柳門虎口では、右手に矩手に折れ、櫓門を通過する構造となっている。土橋の前には大手門、柳門ともに「下馬」と書かれていることから、通常の出入口として使用していたと思われる。寛文4年(1664)以降の絵図では櫓門の前面に高麗門が描かれるほか、内堀を掘削して木橋が設置され、木橋と高麗門の間に食違石垣が見られる。木橋の前には初期絵図と同様に柳門とともに「下馬」と書かれている。これらは徳川綱重による寛文の大修理によるものと考えられ、楽屋曲輪においては他に、曲輪西側の内堀沿い

の土坡が石垣に変更されている。江戸時代中期の柳沢期以降の絵図には、食違石垣は見られなくなる。『楽只堂年録』には、「追手門 元ハ南追手」、「柳門 元ハ西追手」と書かれており、柳沢時代から「追手門」、「柳門」と呼ばれている。『裏見寒話』には、大手門と山手門が勤番の通行御門となっていることが書かれていることから、柳門は、通常通行がなかったと考えられる。

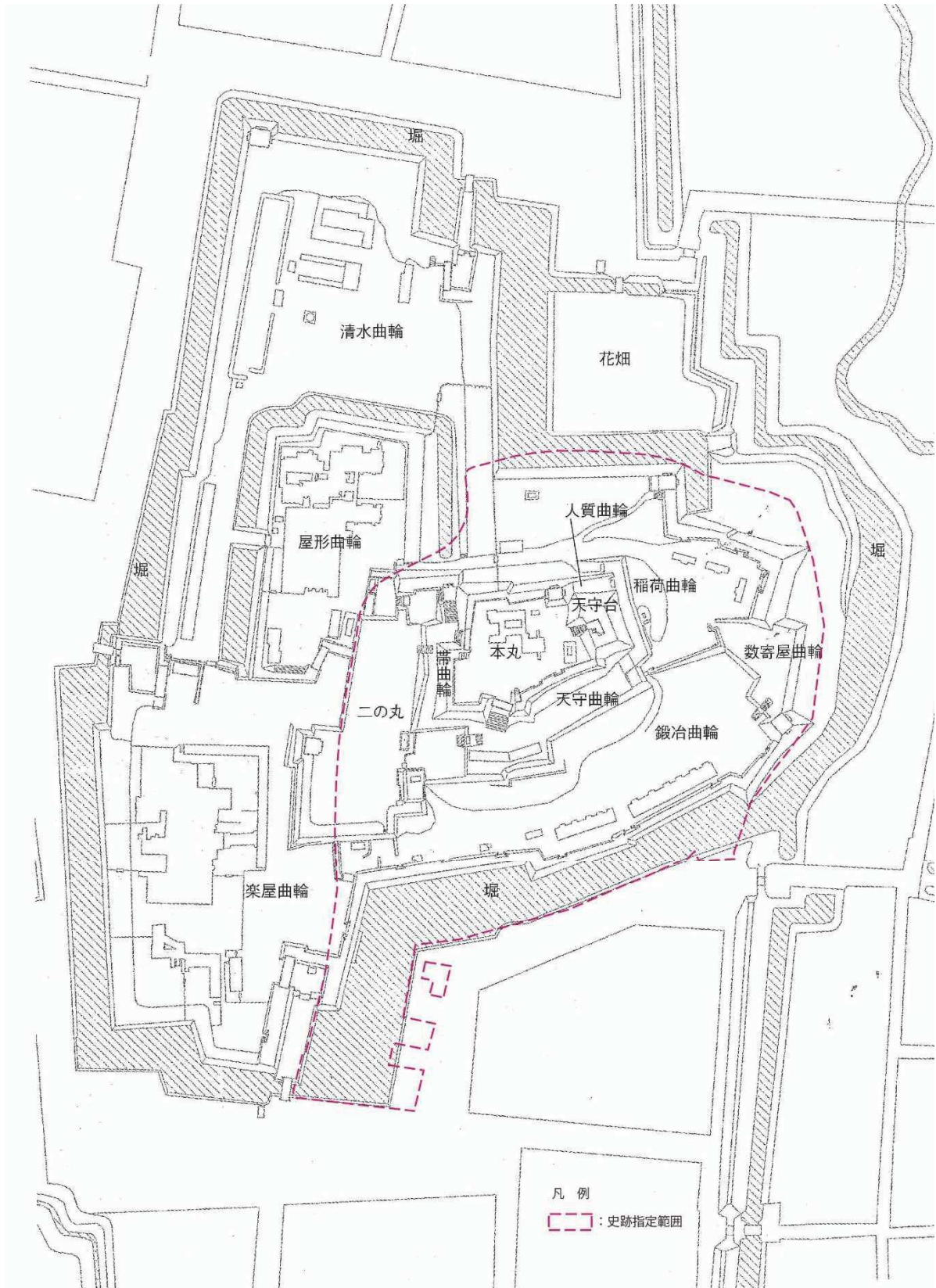
曲輪内の建物・構造物は、築城期から江戸時代前期までは番所のほか、長屋や長屋に連なる区画石垣、温泉が存在するが、江戸時代中期の柳沢期の絵図では、楽屋曲輪書院や能舞台、金蔵などが見られ、当時の政庁の中心地となっている。なお、江戸時代後期の絵図では楽屋曲輪書院や能舞台は見られなくなり、勤番所が描かれている。

現在は曲輪の大半が山梨県庁の敷地内となるなど市街地化が進み、当時の面影は失われている。

⑬ 花 畑

内城の北西部、稲荷曲輪から内堀を挟んで北側に位置する。北・西・南側外周部は内堀に面し、東側は愛宕町口見附から南に連なる土塁で区画されている。江戸時代中期の柳沢期に増設された曲輪であり、曲輪北部に長屋門や番所等の建物が配される。柳沢氏の大和郡山転封後の絵図には建物等は一切描かれなくなる。

明治30年代以降、中央本線の敷設に伴う市街地化が進み、当時の面影は失われている。



甲府城の曲輪配置

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（櫓その1）

	～寛文年間（1644） 城番・城代期			寛文年間（1644）～宝永年間（1705） 徳川綱重・綱豊期		
史料名	『甲州府中之城図』	『甲府城並近辺之絵図』	『甲府城絵図』	『甲州府中城図』	『甲斐国府中城』	『甲州府中絵図』
所蔵者	弘前市立弘前図書館蔵	京都大学蔵※1	肥前島原松平文庫蔵	南葵文庫 (東京大学総合図書館蔵)	松平文庫 (福井県文書館保管)	露木氏蔵
作成時期	1664 以前(寛文4)	1664 以前(寛文4)	1664 以前(寛文4)	1664 以前(寛文4)	1664～1705 (寛文～宝永)	1664～1705 (寛文～宝永)
稲荷櫓						
構造	—	二重	—	—	二重櫓	二重櫓
規模	—	(—)	3 × 4 間	—	—	—
屋根	—	瓦葺・鯨・入母屋・破風	—	—	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋
外壁	—	白壁	—	—	白壁	白壁
その他	記載なし		—	記載なし		
本丸櫓						
構造	三重櫓?	二重	三カイ	二重櫓	二重櫓	二重櫓
規模	—	柱間?	5 × 5 間	—	3 × 4 間	4 × 5 間
屋根	瓦葺・鯨・入母屋	瓦葺・鯨・入母屋・破風	—	瓦葺・鯨付	瓦葺	瓦葺・入母屋
外壁	白壁	一重板壁・二重白壁	—	白壁	白壁	白壁・窓付
その他	—			—		
数寄屋櫓						
構造	一重	—	—	—	三重櫓	三重櫓
規模	—	—	6 × 6・6 × 4 間	—	5 × 6 間	5 × 6 間
屋根	瓦葺・入母屋	—	—	—	瓦葺・入母屋・破風?	瓦葺・入母屋
外壁	白壁	—	—	—	白壁・窓付	白壁・窓付
その他	—	記載なし	石垣のみ	築山または露頭		
稲荷曲輪 東櫓						
構造	—	多門櫓（二重・一重）	矢倉長屋・角矢倉	—	一重櫓	—
規模	—	—	北=4 間、南=3 × 5 間	—	—	—
屋根	—	瓦葺・鯨・入母屋・破風	—	—	瓦葺	—
外壁	—	一重板壁・二重白壁	—	—	白壁	—
その他	記載なし		3 × 13 間	記載なし	北側建物のみ	塀のみ

所蔵者※1 京都大学大学院工学研究科建築学専攻蔵

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（櫓その2）

史料名	宝永・享保年間（1705～1724） 柳沢期		享保年間（1724～） 甲府勤番支配期				明治期
	『楽只堂年録』	『甲府絵図』	『甲府城絵図』	『甲府城図』	『甲府城平面之図』	『甲府城内屋作絵図』	『日本城郭史料集』
所蔵者	柳沢文庫蔵※2	坂田氏蔵	山梨県立博物館蔵	静嘉堂文庫蔵	山梨県立博物館蔵	露木氏蔵	国立国会図書館蔵
作成時期	1705(宝永2)	1724(享保9)	1739(元文4)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1874(明治7)
稲荷櫓							
構造	二重櫓	二重櫓	—	二重櫓	二重櫓	二重櫓	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋・破風	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋 鯨・破風	—
外壁	—	白壁・窓付？	—	白壁	白壁・窓付	白壁・窓付	—
その他	東と北に石落し	定形表記	「良御櫓」			定形表記	平面表記のみ
本丸櫓							
構造	二重櫓	二重櫓	—	二重櫓？	二重櫓	二重櫓	—
規模	西に張出階段か	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋・破風	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋 鯨・破風	—
外壁	—	白壁・窓付	—	白壁	白壁・窓付	白壁・窓付	—
その他	東と北に石落し	定形表記	平面表記のみ	—	石落し張出	定形表記	平面表記のみ
数寄屋櫓							
構造	二重櫓	二重櫓	—	二重櫓	二重櫓	二重櫓	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋・破風	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋 鯨・破風	瓦葺・入母屋 鯨・破風	—
外壁	—	白壁・窓付	—	白壁	白壁・窓付	白壁・窓付	—
その他	北東と南東に石落し	定形表記	「巽御櫓」		定形表記	定形表記	平面表記のみ
稲荷曲輪 東櫓							
構造	—	—	—	—	—	—	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	—	—	—	—	—	—
外壁	—	—	—	—	—	—	—
その他	塀のみ	塀のみ	石垣間数表記	朱線(塀か)表記	塀のみ	塀のみ	—

所蔵者※2 公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会蔵

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（櫓その3）

～寛文年間（1644）

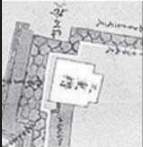
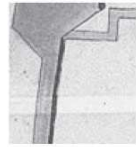
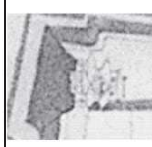

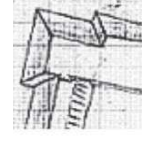



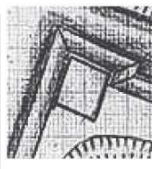

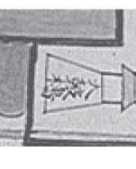
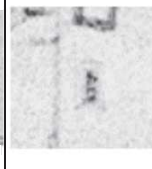
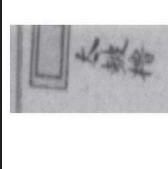
寛文年間（1644）～宝永年間（1705）

城番・城代期

徳川綱重・綱豊期

史料名	『甲州府中之城図』	『甲府城並近辺之絵図』	『甲府城絵図』	『甲州府中城図』	『甲斐国府中城』	『甲州府中絵図』
所蔵者	弘前市立弘前図書館蔵	京都大学蔵※1	肥前島原松平文庫蔵	南葵文庫 (東京大学総合図書館蔵)	松平文庫 (福井県文書館保管)	露木氏蔵
作成時期	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664~1705 (寛文~宝永)	1664~1705 (寛文~宝永)
月見櫓						
構造	三重櫓	二重	三カイ	二重櫓	三重櫓	三重櫓
規模	—	柱間で判断	5×5間	—	5×6間?	—
屋根	瓦葺・鯨・入母屋	瓦葺・鯨・入母屋・破風	—	瓦葺	瓦葺	瓦葺・鯨
外壁	白壁	一重板壁・二重白壁	—	白壁	白壁・窓付	白壁・窓付
その他						
清水櫓						
構造	一重	—	—	—	二重櫓	—
規模	—	—	—	—	—	—
屋根	瓦葺・入母屋	—	—	—	瓦葺	—
外壁	白壁	—	—	—	白壁	—
その他	—	石垣規模のみ	石垣規模のみ	記載なし		石垣のみ
太鼓櫓	—	—	—	—	—	—
構造						
規模						
屋根						
外壁						
その他						
八方正面櫓	—	—	—	—	—	—
構造						
規模						
屋根						
外壁						
その他						

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（櫓その4）

	宝永・享保年間（1705～1724） 柳沢期		享保年間（1724～） 甲府勤番支配期				明治期
史料名	『楽只堂年録』	『甲府絵図』	『甲府城絵図』	『甲府城図』	『甲府城平面之図』	『甲府城内屋作絵図』	『日本城郭史料集』
所蔵者	柳沢文庫蔵※2	坂田氏蔵	山梨県立博物館蔵	静嘉堂文庫蔵	山梨県立博物館蔵	露木氏蔵	国立国会図書館蔵
作成時期	1705(宝永2)	1724(享保9)	1739(元文4)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1874(明治7)
月見櫓							
構造	二重櫓	三重櫓	—	—	二重櫓	二重櫓	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋・破風	—	—	瓦葺・入母屋 鯨・破風	瓦葺・入母屋 鯨・破風	—
外壁	—	白壁・窓付	—	—	白壁・窓付	白壁・窓付	—
その他	東側建物にカケ有	定形表記	石垣間数表記	朱線(塀か)表記	定形表記	定形表記	櫓台のみ
清水櫓							
構造	二重櫓	二重櫓	—	二重櫓	二重櫓	二重櫓	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	東西北に石落し	瓦葺・入母屋・破風	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋 鯨・破風	瓦葺・入母屋 鯨・破風	—
外壁	—	白壁・窓付	—	白壁	白壁・窓付	白壁・窓付	—
その他		定形表記	平面表記のみ		定形表記	定形表記	平面プランのみ
太鼓櫓							
構造	—	—	—	鐘楼	鐘楼か	鐘楼か	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	—	—	瓦葺か	—	—	—
外壁	—	—	—	—	—	—	—
その他	平面表記のみ	平面表記のみ	平面表記のみ		平面表記のみ	平面表記のみ	平面表記のみ
八方正面櫓	—	—	—	—	—	—	—
構造							
規模							
屋根							
外壁							
その他							


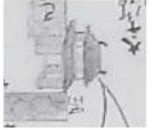




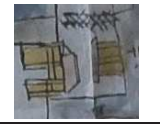

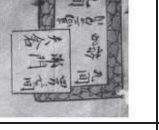
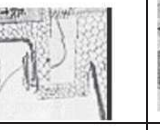
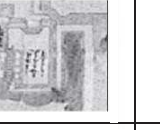



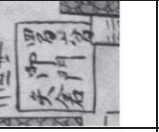
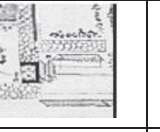
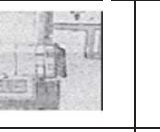



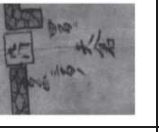
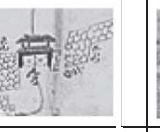
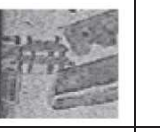



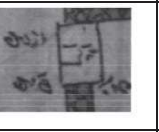
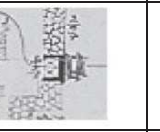
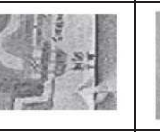

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（門その1）

～寛文年間（1644）

寛文年間（1644）～宝永年間（1705）

城番・城代期

徳川綱重・綱豊期



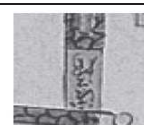
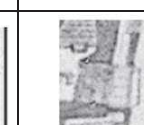
史料名	『甲州府中之城図』	『甲府城並近辺之絵図』	『甲府城絵図』	『甲州府中城図』	『甲斐国府中城』	『甲州府中絵図』
所蔵者	弘前市立弘前図書館蔵	京都大学蔵※1	肥前島原松平文庫蔵	南葵文庫 (東京大学総合図書館蔵)	松平文庫 (福井県文書館保管)	露木氏蔵
作成時期	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664以前(寛文4)	1664~1705 (寛文~宝永)	1664~1705 (寛文~宝永)
大手門						
構造	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門
規模	—	—	4×7間	7間?	—	—
屋根	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—	瓦葺・入母屋(切妻?)	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋
外壁	白壁	下層板壁・櫓部白壁	—	櫓部白壁	白壁	白壁
その他	—	—	—	—	—	—
山手門						
構造	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門
規模	—	5間?	4×7間	—	—	3×7間
屋根	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—	瓦葺・入母屋(切妻?)	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋
外壁	白壁	下層板壁・櫓部白壁	—	櫓部白壁	白壁・櫓部窓付	白壁
その他	—	—	—	—	—	—
柳門						
構造	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門
規模	—	5間?	4×6間	間?	—	—
屋根	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—	瓦葺・入母屋(切妻?)	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋
外壁	白壁	下層板壁・櫓部白壁	—	櫓部白壁	白壁・櫓部窓付	白壁
その他	—	—	—	—	—	—
鉄門						
構造	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門	櫓門
規模	—	7間3間梁下4間	3×4間	6間?	—	3×5間
屋根	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—	瓦葺・入母屋(切妻?)	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋・鯨
外壁	白壁	下層板壁・櫓部白壁	—	櫓部白壁	櫓部白壁	—
その他	—	—	—	—	—	—
銅門						
構造	櫓門	櫓門	—	櫓門	櫓門	櫓門
規模	—	5間3間梁下4間	4×6間	間?	—	3×5間
屋根	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋・鯨
外壁	白壁	下層板壁・櫓部白壁	—	櫓部白壁	櫓部白壁	—
その他	—	—	—	—	—	—

甲府城跡主要歴史的建造物比較検討表（門その2）

宝永・享保年間（1705～1724）
柳沢期

享保年間（1724～）
甲府勤番支配期

明治期

史料名	『楽只堂年録』	『甲府絵図』	『甲府城絵図』	『甲府城図』	『甲府城平面之図』	『甲府城内屋作絵図』	『日本城郭史料集』
所蔵者	柳沢文庫蔵※2	坂田氏蔵	山梨県立博物館蔵	静嘉堂文庫蔵	山梨県立博物館蔵	露木氏蔵	国立国会図書館蔵
作成時期	1705(宝永2)	1724(享保9)	1739(元文4)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1724以降 (享保12)	1874(明治7)
大手門							
構造	—	櫓門	—	櫓門	櫓門	櫓門	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋	—
外壁	—	下層板材・櫓部白壁	—	白壁	下層板材・櫓部白壁	下層板材・櫓部白壁	—
その他	平面表記のみ		平面表記のみ	定形表記			平面表記のみ
山手門							
構造	—	櫓門	—	櫓門	櫓門	櫓門	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—
外壁	—	下層板材・櫓部白壁	—	白壁	下層板材・櫓部白壁	下層板材・櫓部白壁	—
その他	平面表記のみ		平面表記のみ	定形表記			平面表記のみ
柳門							
構造	—	櫓門	—	櫓門	櫓門	櫓門	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋・鯨	—
外壁	—	下層板材・櫓部白壁	—	白壁	下層板材・櫓部白壁	下層板材・櫓部白壁	—
その他	平面表記のみ		平面表記のみ	定形表記			平面表記のみ
鉄門							
構造	—	櫓門	—	櫓門	櫓門	櫓門	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋	—	瓦葺・入母屋・鯨	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋	—
外壁	—	下層板材・櫓部白壁	—	白壁	下層板材・櫓部白壁	下層板材・櫓部白壁	—
その他	平面表記のみ		平面表記のみ	定形表記			平面表記のみ
銅門							
構造	—	櫓門	—	—	櫓門	櫓門	—
規模	—	—	—	—	—	—	—
屋根	—	瓦葺・入母屋	—	—	瓦葺・入母屋	瓦葺・入母屋	—
外壁	—	下層板材・櫓部白壁	—	—	下層板材・櫓部白壁	下層板材・櫓部白壁	—
その他	平面表記のみ		柵門	門			平面表記のみ

2) 石垣

① 石垣の概要について

甲府城跡の石垣は、その積み方の特徴から築城期に構築された石垣の残存度がきわめて高く、野面積み石垣としては東日本有数の事例と言える。今日現在残っている石垣や、いくつかの歴史史料から江戸時代の修理状況は把握できるものの、他城郭と比較しても極めて少量といえる。

恐らく、江戸時代を通じて幕府直轄であったことが主な理由と想像できるが、むしろ野面積みがこれほど贅沢に残ったという事実は、現在の甲府城跡最大の文化財的価値に繋がっている。

現在の甲府城跡は、天守台・本丸といった城郭の中核部分を中心に約 6ha が残るのみである。この範囲に残る石垣をみると、圧倒的に野面積みの石垣が多い。天守台を筆頭に本丸、天守曲輪、人質曲輪、稻荷曲輪、数寄屋曲輪、二の丸、鍛冶曲輪の各所で 10m 級の野面積み石垣が多くみられ、甲府城が野面積みという石積技術の導入を得て築城されたことを証明している。

その他に、二の丸南東部・本丸北西部と、天守曲輪の北東隅で 2 種類の石垣を見ることができ。つまり、現在の甲府城跡内では 3 種類の積み方の違う石垣を見ることができ、その違いは時代差と考えられる。そして、時代差とは技術差であり、石の配し方、石材の加工の程度、石垣の勾配、隅角部の様子、目地（石同士の継ぎ目）、詰石など多くの点が要素としてあげられる。石垣を外観で観察する場合の重要な観察項目であり、これらをもとに歴史経過とあわせ、城内個々の石垣をみると次のようになる。

ア 築城期の石垣

築城期の石垣は、浅野氏が慶長 5 年（1600）までに完成させた野面積み石垣を指す。しかし、時間設定では若干の時間幅を持たせたい。

理由は、慶長 5 年に浅野氏が完成させた直後、関ヶ原の戦いを経て、浅野氏は和歌山へ移封となっている。代わって徳川家康の重臣平岩親吉が城代として甲府城へ入ってくる。この背景を踏まえて城内の発掘調査成果と石垣をみてみると、稻荷曲輪東の石垣では現状の野面積み石垣の内側から、同じく野面積みの石垣が発見されている。

つまり、同じ野面積みで、一度積んだ石垣のうえにさらに積み直しを実施したことが確認されたのである。また、現在の武徳殿が建つ二の丸西側の野面積み石垣では、一度は隅角部として積まれたが、この部分を埋め殺し石垣を延長させている。同様な事例は稲荷曲輪と数寄屋曲輪の南側接続部分で今日も見る事ができる。

これらの現象は、同じ野面積み石垣の段階で、曲輪の形状変更や縄張り変更が実施されたと推定することができ、浅野氏が石垣を積みながら変更していった可能性もあるが、その直後の平岩氏に変更させた可能性も捨てきれない。したがって、築城期の野面積み石垣といった場合、その築造のほぼすべて浅野氏によるものであるが、平岩氏の関与を考えると、やや幅広の時間設定が必要といえる。

補足であるが、『甲斐国志』には平岩氏が慶長 6 年（1601）2 月に「上州ヲ転ジテ甲州ニ移リ新タニ府之城ヲ築キテ」との記載がある。具体的な作業内容には触れていないが、興味深い記録である。

次に、築城期の石垣の技術的な特徴をみてみる。内部構造物の中心には、盛土と呼ば

れる砂質土などを突き固めた人工的な背面構造がある。場所によっては、自然岩盤などであったりもする。この盛土と石垣石材の間には平均一間程度の幅で裏栗石とよばれる5～30cm程度の石が隙間なく入れられている。基本的には石垣石材・裏栗石・盛土の三位一体が整って石垣は存在しているといえる。そして、石垣はいわば壁のようなものであり、内部構造物に寄りかかる擁壁と捉えることができる。

この寄りかかった傾斜を勾配と呼んでいる。織豊期以前の石垣も当然勾配を持つが、研究史によると直線的であることが多いとの指摘がある。

しかし、織豊期の石垣は、その勾配に一工夫ある。甲府城跡の石垣では、下部付近の勾配（初期勾配）は平均角度で65度内外である。しかし、上部に向かって勾配は徐々にきつくなり、石垣上部では70度を越える。その結果、外観はきれいなアーチ状の弧を描く姿になる。実際には最初から曲線で弧を描いているわけではなく、いくつかの直線を繋ぐときに少しずつ角度を変えた結果である。このような勾配の付け方はいくつかの方法があり、同じ甲府城内でも地形や形状により上手に変化させているようである。いずれにせよ、その目的は石垣を高く、大きく積んでいくために必要な石垣自体の強度をだすためと考えられる。

石の使い方は、場所によっていくつかのタイプに分かれるが、野面石（自然石）か、矢穴などで粗割りした程度の石材をほとんど使っている。積む際には、前後左右の石としっかりかみ合わせ安定感をとり、表面で見える目地（石と石の隙間）には詰石を入れ、石尻と呼ばれる内部側は飼石などと呼ばれる小型の石でやはりしっかりと安定させている。これも、石垣を高く、頑丈に積むための当時の技術といえる。

また、堀など地盤が弱い地点では、玉石を敷き詰めた上に杉や松などの丸太を並べ、不等沈下を防ぐ胴木と呼ばれる施設も考え出されている。

このような石積技術は、先に述べたとおり古代から日本にあったわけではなく、お城づくりで高石垣を積み上げる必要性が生じて開花した土木技術である。このような技術で甲府城築城期の石垣は積まれたのである。

代表的なものとして二の丸西面石垣（N-44）や稲荷曲輪南東石垣（I-40）では、築城期野面積み石垣に野面積み石垣が積み足されているほか、稲荷曲輪東側石垣（I-74、76）等のように、築城期野面積み石垣の前面に野面積み石垣が築造され、結果的に二重構造となった石垣がある。

イ 江戸時代初期の石垣

江戸初期の石垣は実像として掴み切れていない部分がある。しかし、石垣の積み方の様相で、他の城郭と比較してみると様相が類似することもあり、江戸初期という時間設定は甲府城の石垣を考えるうえで必要と考えている。

先述したとおり、この時期の石垣の実像が不明なので、古文書で江戸初期の石垣の時間軸を設定してみる。1点目は、保坂吾良吉氏が論じた『宇津谷村の職人集団』掲載の史料である。史料は寛文3年（1663）に書かれた「石切人数書上ヶ帳」で、内容は15人の石工職人名を列記したうえで「以慶安年中御城御普請之節御用相勤候」と過去実績を明記している。

「石切」とは一般的に石工職人を指し、慶安年間（1648～52）は第二次甲府城番制の時期であり、御城を甲府城とすれば、彼ら宇津谷の石工職人が集団で御普請に関わりを

持った根拠といえる。ただし、城内のどの部分の石工事に関わったかは今のところ不明である。これを便宜的に「慶安の石垣」と呼ぶ。

2点目は、寛文4年(1664)前後に集中する2つの史料である。1つは、やはり保坂氏が取り上げた史料で、前年の寛文3年(1663)に書かれた前掲と同じ「石切人数書上ヶ帳」である。ここでも、15人の石工職人名を挙げている。しかし、あくまで名前を書き上げた帳面であり、実施・実績はわからない。もう1つは国立公文書館内閣文庫蔵の『甲府日記』が根拠で、寛文4年に幕府より2万両を得て改修の実施を記録するものである。これは改修の着手日が明確であることから、実施されたといえるが、規模・内容の詳細は今のところ不明である。ただ、2万両の事業と考えると、建物だけではなく土台の石垣にも手を加えていることを想像するのに無理はなく、15名の宇津谷石工職人の石積み工事への従事は十分に想定できる。これを便宜的に「寛文の石垣」と呼ぶ。

3点目は、元禄8年(1695)9月から10月にかけて「甲府御城石垣破損付」で始まる幕府間とのやり取りの記録である。出典は、内閣文庫の『諸事書留』である。内容は石垣修復の計画絵図を持参し幕府側土屋相模守と交渉した記録である。しかし、計画の絵図面も現在のところ未確認で、実施については不明である。これを便宜的に「元禄の石垣」と呼ぶ。

これら、「慶安の石垣」、「寛文の石垣」、「元禄の石垣」が江戸時代前半のなかで文献・絵図を軸に考えられる石垣である。

まずは、「寛文の石垣」から、根拠となる絵図を示しながら記していく。注視すべきは楽屋曲輪西側の堀と曲輪の境界部(現在の山梨県庁南西部付近)の描写である。寛文年間以前に描かれたと考えられる「幸長公甲州府中城図」(『甲府城総合調査報告書』山梨県教育委員会、昭和44年(1969)刊)や「極秘諸国城図」(『江戸・関東の城下町』平凡社、平成10年(2008)刊)によれば、この境界部は土塁として描かれている。

これに対し、「甲州文庫」(山梨県立博物館)や『楽只堂年録』(柳沢文庫蔵)など寛文年間以降、取り分け1700年代初頭の柳沢時代から描かれた絵図では、石垣が描かれている。つまり、寛文年間を境としてみられる城郭構造表現の差から、この地点の石垣は寛文年間を境として積まれたとの仮定が可能となる。

一方、古写真では、『ふるさとの思い出写真集甲府』(昭和53年(1978)、国書刊行会刊)に掲載されているもので、明治45年(1912)に「寛文の石垣」の地点を現在の主要地方道甲府韮崎線(平和通り)から山梨県庁方面を撮影した写真がある。他に、大正8年(1919)9月撮影の記録もあるが、古写真から見て取れる石垣の外観は、横目地が直線的にとおり、個々の石材の形状はほぼ整い精加工が想定できる、急勾配の石垣である。このタイプの積み方は、仙台城や若松城など各地の寛永年間以降の城郭石垣に見られるものであることも踏まえ、「寛文の石垣」と設定することができる。

また、この時期は甲府宰相徳川綱重(3代将軍家光の三男)の時代である。支配は、引き続き城代が執り行ったが、稲荷櫓に代表される建物増改築も実施され、宰相格に相応しい大がかりな事業が2万両の経費の中で実施されたといえる。

次に、「慶安の石垣」と「元禄の石垣」について論じる。現在城内に残る野面積みを除いた江戸期の石垣は、二の丸南東部・本丸北西部と、天守曲輪の北東隅である。

二の丸の石垣は、築城期には野面積みとして積まれたが、その後積み直されたと石材

利用状況から判断できる。本丸の石垣は平成の改修工事で積み直しをしているが、古写真などから旧状を推定することができる。両者に共通することは明らかに野面積みではないこと。個々の石材は中程度の加工がなされ、石同士の目地は狭く、詰石も小型少量化している。相対的な比較をすると築城期の野面積みより進んだ段階であり、加工状況や積み方の細やかさから推測すると「寛文の石垣」よりは古いと位置付けられる。

慶安年間は、第二次甲府城番制時代であり、支配体制からも大がかりな改修工事よりは、むしろ部分的な修復というニュアンスが強い。このことから、二の丸南東部・本丸北西部の石垣は「慶安の石垣」の可能性が高いといえる。

最後に残る「元禄の石垣」は、『諸事書留』にある石垣の破損に伴う幕府重臣とのやり取りから計画性が極めて高いと言えるが、現在では実施の根拠となる情報を持ちでないでいる。ただ、より江戸中・後期の石垣との検証は必要であるが、大手門（現在の山梨県庁南東側・防災新館東交差点付近）などを写した古写真には、上述した石垣とはまた異なるタイプの石垣が見える。この点については、次項で詳細に検討したい。

代表的なものとして銅門西面石垣（H-26）、天守曲輪北面・東面石垣（Tn-1、2）は、いずれも加工石材を布積みにした石垣であり、隅角部は隅脇石を伴う算木積みで、江戸切りが採用されている。矢穴の幅は7cm程度と、築城期の約12cmと比べて幅狭であり、築城以降の江戸期に改修されたものと考えられる。天守曲輪北面・東面石垣については『楽只堂年録』所収の絵図に「石垣孕み出し候」の記載がみられる。また、当該石垣は大正6年（1917）に起工され、大正11年（1922）に竣工された謝恩碑の部材等を搬入される際に一部が解体されたとの伝承がある。

上記の石垣はいずれも平成2年（1990）以降の舞鶴城公園整備事業の中で解体を伴う修理が実施されている。

なお、鍛冶曲輪や中の門周辺には幅約5～7cmの矢穴列が残っており、岩盤の規模から常時とは考え難いが築城以降にも石材が採取されていたものと推測される。ただし、これらが石垣改修に伴う痕跡であるかは不明である。

『県指定史跡甲府城跡 甲府城跡保存活用等調査検討委員会報告書』では、近世の石垣改修について、文献等の記載を基に、①寛文3年の「石切人数書上ヶ帳」に記載された慶安年間の御普請で実施された可能性のある改修、②寛文4年に幕府から2万両を得て実施した改修、③元禄8年の「甲府御城石垣破損付」の記載から実施された可能性のある改修、④『楽只堂年録』に記載された内容から柳沢期に実施された可能性のある改修等、撤去や新たな築造を含む石垣の改修履歴を想定している。各石垣の改修時期については、石垣構築技術の年代観と文献からの断片的な情報を頼りに検討せざるを得ない状況であり、今後検討を重ねる必要がある。

ウ 江戸中・後期の石垣

宝永元年（1704）から約20年間、柳沢氏が唯一の大名として甲斐国を支配している。短期間ではあるが、この時期を江戸中期と呼称し、柳沢氏の大和郡山移封以降の甲府勤番時代から幕末までを江戸後期と区分しておく。

江戸中期の石垣関連の記録は、特に柳沢文庫（大和郡山市）に残っている。その中でも、宝永2年（1705）に描かれた『楽只堂年録』の絵図は城内の石垣の撤去・改修を具体的に示し、幕府へその許可を求めているものである。江戸期を通じてどの城郭でも

「武家諸法度」に従い、小さな改修であっても幕府に届けて許可をもらう制度になっている。甲府城の場合、この絵図のように改修箇所が克明に記されているのは現在のところ柳沢文庫の史料に限られ大変貴重である。

さて、この絵図で城内の積み直し工事を要望しているのは、天守曲輪北東部の隅角部付近とその西側延長にある石垣の2箇所である。天守曲輪北東部の石垣は、大正6年(1917)に起工され、大正11年(1922)に竣工された謝恩碑建設の際、一部取り壊されており、完全な姿では残っていない。しかし、改修工事に伴う調査で、部分的にその積み方の特徴を良く残していることがわかっている。

石垣はほとんど目地の隙間がなく積まれ、個々の石材の加工は江戸初期の石垣と比較しても精緻であり、現在の間知積みに近い。一般的には「切込み剥ぎ」と呼ばれる積み方で、城内に残る石垣の中でも極めて特徴的である。この石垣を、柳沢氏の支配した江戸中期という時代観で捉えることは、江戸城や駿府城などの全国的事例からも合致している。

江戸時代後期の石垣については、不明な点が多い。支配体制では、幕府直轄地で甲府勤番支配の時期であり、藩主もいないことから石垣の改修というような大規模工事は実施せず、どちらかといえば補修やメンテナンスで石垣を維持していたと想定される。伝聞ではあるが安政の大地震で城内南側の堀の一部が崩壊し、これを修復したというが、残念ながら近代化の中で間知積みにされ、その姿を知ることはできない。

エ 近代に改修された石垣

近代以降、平成初期の舞鶴城公園整備事業以前に修理された石垣には、次のものがある。

坂下門南側石垣から二の丸南面石垣の一部にかけて(N-35~38)は、明治5年(1872)頃に甲府の石工大久保善治郎によって改修されたことが判明している。いずれも加工石材を布積みにした石垣であるが、特にN-35石垣は乱積みで鑑遣いの石材配置がみられるなど、甲府城築城期の野面積み石垣を模したものと思われる。隅角部を構成する石材は控えが短く、明確な算木積みとならない。また江戸切りが採用されている。二の丸西面石垣(N-44)の上部は昭和30年代に改修されている。

その他、古写真や舞鶴城公園整備事業時に撮影された改修前の石垣の写真、石垣の観察所見から、次の石垣が近代に改修されていたことが伺える。二の丸北面石垣(N-1)、天守曲輪南東面石垣(Tn-2~5)、鍛冶曲輪南面石垣(K-30)、二の丸南面石垣の上部(N-37~38)等。これらの石垣は舞鶴城公園整備事業に伴い改修されており、それ以前の改修時の姿は現在留めていない。

② 石積みの特徴について

ア 石垣の勾配

城内石垣の平均勾配は66.6度を測り、緩やかな勾配のグループは55~60度、きつい勾配のグループは72~84度を測る。ただし、きつい勾配のグループは石垣の高さが5m以下という条件が付されるという傾向がある。

城内の石垣勾配については、おおよそ次の3種類に分類される。

- ①根石から高さ1/3~1/2までは直線的で、天端まで法を返していく。
- ②根石から天端までの間で、一定間隔で法を返していく。

③ほぼ直線か、変化が認めにくい。

①は、天守台等で見られ城内では多い傾向にある事例といえる。なかでも天守台東南隅角部は高さ13mのうち約1/2まで直線勾配で、以降2ヶ所で法を返す勾配を構成している。一方、その真西20mに位置する本丸東南隅角部は高さ9mのうち根石から1/3強までは直線勾配で、以降天端に向かい3ヶ所で法を返す状況である。詳細な測量図なしに言及することは危険であるが、少なくとも前者は直線勾配の石垣に、後者は緩やかな弧を描く勾配に遠望できる。両者は極めて近い隣接関係にあるにもかかわらず、勾配のあり方に変化が認められる。

②は、稲荷曲輪の稲荷櫓台石垣に認められる勾配である。根石からおおよそ等しい間隔で勾配が返されている。

③は、天端高さの低い石垣にみられる傾向にある。また、本丸南西部周辺の石垣（謝恩碑周辺）に直線的な傾向にある石垣が認められるが、微細な変化であるため石垣変位変形による影響が排除できないため詳細については不明である。

イ 隅角部

隅角部の構造や石材の利用方法は、広く指摘があるようにその石垣の時代性や技術性がもっとも端的に表れる部位とされる。

また、いくつかの歴史史料からも隅角部石材の石材や積み方（強度）に細心の注意を向けていたことが分かることから、仕上がりの結果としては意識・技術レベルの水準が反映されているといえる。

甲府城跡の隅角部を観察するといくつかの要素が抽出できる。

（積み方 [算木積み]）

①天守台周辺の隅角部では1/3～1/2以内の数量で算木積みが認められる。

②数寄屋櫓台、稲荷櫓台の隅角部では1/2以上の比率で算木積みが認められる。

③数寄屋櫓台に連続する石垣の隅角部では、ほとんど算木積みが認められない。

現状では、石垣構築当時に算木積みまたはそれに類する技術が現場側で意識されていたことはほぼ間違いないと言える。しかし、その手法や効能までが現場の技術として浸透しきっていたか否かは不明であり、この点が明瞭な算木積みを見出せない理由や技術的時代背景に係わっている可能性がある。

また、算木積みであっても配石の方法が粗雑で一点荷重により維持している事例が複数存在する。これは石垣の経年変化を勘案する必要もあるが、これに起因する破損事例も稲荷櫓台石垣改修工事では多く発見されている。

ウ 石材加工

隅角部の表面加工については次の傾向が伺える。

①加工せずに、自然石の角部を使用

②加工せずに、自然の割れ面を使用

③矢穴で分割した石材を使用

④自然分割した石材をノミ加工または粗割で整形した石材を使用

この場合、①②は自然な稜線になるが、据わりが悪くなる傾向がある。恐らく稜線を直線的に通すため石尻がやや不安定に据えられることに原因があるといえる。③は特に稲荷櫓台石垣で24石中8石が矢穴で割られた石材を使用するという強い傾向が調査

で確認され、築石部と比較すると極めて高い使用比率といえる。④の加工は玄能等によるハツリとノミによる痕跡の2種類が認められる。特に前者は隅角部の稜線を作り出す場合に多く認められる。後者は面の整形（瘤の除却等）に用いられるような痕跡が多く、面全面にノミ加工が入るような事例はほとんどない。

また、築石部石材の加工は城内各所で認められるが、必ずしも全石材に施されている訳ではなく、ハツリは石材縁辺部分の整形（石材を割ったときに生じるステップ状の高まり）やおそらく瘤状の凸部の除去におこなわれたものであろう。

いずれにしても、隅角部と築石部ともに石材への加工は必要最低限の作業と考えられ、江戸時代中頃には一般的となるスタレ状の表面加工および化粧性のある加工はほとんど確認されない。

エ 矢穴

矢穴は、石材形状や硬度、節理面の有無により穿たれる個数は異なるが、計画線に沿って一定間隔で鑿を用いて掘られ、矢によって破断させる。

甲府城跡の場合、築城期に位置付けられる野面積み石垣に長さ11～15cm、幅5～7cm、深さ8～11cmの通称「四寸矢穴」が掘られており、定量化の傾向にある。

また、江戸期に構築された城内石垣にも矢穴は認められるが、その形状は長さから通称「三寸矢穴」と呼ばれ長さ6～8cm、幅4～6cm、深さ5～7cmと小形化する傾向にある。この差は時代差と甲府城では捉えることができる。

オ 石材の配石

城内の築石部では、基本的には石材を横長に使用する傾向がある。その間隙に比較的面は小さいが控え長の長い石材が投入され、規模の大きな詰石が入る配石が一般的である。

これとは対照的に、石材を縦長に使ういわゆる「鏡石」も各所に確認できる。その顕著な事例が本丸南に位置する鉄門の石垣である。門の側壁にあたる両側には城内でも最大規模の石材を縦横に配石し特異な石垣となっている。全国的な事例も報告されているが、やはり正面性や象徴的な場所に縦使いの配石がおこなわれているという傾向では一致すると思われる。

ただし、縦使いの配石が必ずしも全て同じ意味を持つ訳ではなく、横長配石主体の築石部でも単発で縦使いの石材が配石される事例も各所である。一般的に、石材を縦長に使用するのとは好ましい技術とはいえないが、城内で観察できるこのような事例は城郭等の石積技術史のなかでも古相に位置付けられるものではないだろうか。

カ 石質

城内で確認できる石垣石材はほぼ両輝石安山岩である。これは甲府城の立地と周辺地盤が安山岩であるという地質的特徴と一致し、また石切場に残る石材とも合致するため、甲府城の石垣石材は、甲府城内外に存在する石切場が供給源であると言える。

3) 堀

堀は防衛上の機能だけでなく、内城と武家屋敷、町人地を区画する役割を担っていた。また、水路と接続することで排水にも関わっていたと考えられる。甲府城下町は、内城を武家地と町人地が同心円状に取り囲む構造となっており、内城と武家地の間を内堀が、武家地と町人地の間を二の堀が区画し、さらに三の堀が町人地を囲んでいる。

堀は明治時代以降の市街地開発等により大きく埋め立てられた他、改修によって幅が減じられたり、石積みがコンクリート擁壁に改められたりしているものの、特に二の堀や三の堀は、開渠や暗渠によってその姿を留めている個所が多い。また、埋め立てられたことにより現地に保存されていることが判明した事例もあり、後述するように発掘調査によって位置や規模、構造の一端が明らかとなった事例がある。

①内堀

近世に制作された絵図の中には北側を空堀、南側を水堀として表現されたものがある。これは、甲府城が扇状地上に立地し、北から南にかけて傾斜していることによるものと推測される。現在は鍛冶曲輪に面した内城南側の一部を残して他は埋め立てられており、地下に保存されている。

江戸時代中期に成立した「楽只堂年録」所収の絵図には東側の堀の中に堀を横切る石積みが描かれている。機能は明らかでないが、先述のように甲府城が南に傾斜する扇状地上に立地することから、水位調整を目的とした構造物の可能性はある。堀の中には他にも構造物があった可能性があるが、これまでの発掘調査ではこういった遺構は発見されていない。

②二の堀

現在、二の堀西側から南側にかけては一級河川濁川として、その他の部分は水路として残っている。南西に位置する地点では、発掘調査により二の堀跡と土塁跡が発見されている。また青沼町口東側に隣接する二の堀内側での発掘調査では、暗渠による二の堀への排水や集水升を通して二の堀に排水していたと推測される水路が発見されている。これは城下町における排水と二の堀の関係を知る貴重な遺構として、現地に埋設保存した。

③三の堀

武家地北側の町人地を囲む三の堀と、武家地南東側の町人地を囲む三の堀とに分かれている。現在、武家地南東側の町人地を囲む三の堀は南側が一級河川濁川として残っている。その他の部分は水路となるかもしくは大部分が埋め立てられているが、現在の町割りに名残が残っている個所もある。武家地北側の町人地を囲む三の堀も、一部が水路として残っている。

武家地南東側町人地を囲む三の堀の内、南東隅の辺りからは東に濁川流路と接続しており、一帯は深町河岸として船着き場が置かれ、富士川を上って濁川に入った舟がこの地で荷を下ろした。なお、当河岸は昭和3年(1928)の身延線開通の頃まで利用されていた。

4) 愛宕山石切場

愛宕山石切場は甲府城の北東部に位置する愛宕山の山裾に立地する。江戸時代以降、この地域が「愛宕町」と称されていたことから「愛宕町石取場」と呼ばれている。当地は「石取場」、「御用石場」といった標記も見られる。甲府城に柳沢が入城する以前の町名が見られる『諸国居城図』(寛文4～宝永2年(1664～1705)財団法人前前田育徳会所蔵)には、すでに「石取場」の表記が見られることから、享保期以前から当地で石材採取が行われていたことを推測することができる。

石工の歴史を概観すると、甲府城に関わったであろうと推定される人物に、慶長11年(1606)、浅野幸長(この時点で紀州藩主)の家臣で、武田の遺臣である矢島長雲(甲州

人の記録あり) がいる。將軍の命を受けた浅野幸長は矢島長雲に命じて虎ノ門に堰を設けさせ、赤坂御門に至る溜池を作った。川除等の普請技術を有する有能な人材が、武田家滅亡後に再任用されて活躍していたことがわかる。近世城郭を造営するに当たり、豊臣系技術者集団の指導の下、高い土木技術を有した在地系技術者集団とともに対応したことを理解することができる。なお、在地の技術者集団については『宇津谷村石切人数書上帳』（寛文3年（1663）『甲斐市小林正博家文書』）に15人の在地系石工職人の名が記されており、その存在が知られる。

また、正徳6年（1716）には愛宕町の名主七兵衛らが高遠の石切職人の在留届を、享保3年（1718）「愛宕町石切宿」六兵衛らが在留届を提出している。さらに『愛宕町絵図』（享保改『甲州文庫』山梨県立博物館蔵）には、石取場のほか町屋敷や石切道の三念（年）坂が描かれており、この地に在留して活躍した高遠石工をはじめとして、継続的な石取に利用されていたことを伺うことができる。在地の職人とともに、出稼ぎの高遠石工の活躍が見えてくる。こういった出稼ぎ行為の姿は、大工や瓦職人にもみられる。

当該地点が石切場である点については、次の江戸期の文献史料3点と絵図1点、現地に立地する大正年間の石碑1点が根拠資料としてあげられる。

1) 『甲斐国志』巻之五十五 神社部第一 山八幡の項

文化11年（1814）に甲府勤番支配の松平定能が編纂した『甲斐国志』には、山八幡は戦国武田時代には八日町にあったが、文禄年間に浅野氏甲府城築城にともない、社地が石山であるため現在の甲府市東光寺一丁目に移転したことを記述している。

「(中略) 躑躅ガ崎ニ館アリシ頃ハ今ノ八日町此ノ辺リニ在リテ八日市場ト称ス文禄中浅野氏当城ヲ築カルル時社寺ハ悉ク石山ナル故ニ今ノ地ニ遷シ岩石ヲ切取りテ本城ノ塁トセラル因リテ石取場ト呼ベリ」

なお、八日町（八日市場）の所在は不明であるが、現在の愛宕町周辺と考えられる。

2) 『御用留帳』（大木家文書）

市内横近習にあった鐘撞堂を宝永5年（1708）に愛宕町の石取場へ移すという記載がある。

3) 『御用日記』（坂田家文書）

明和7年（1770）に市内元紺屋町から出火し、愛宕町の四寺院を焼いたが、石取場で止まったという記載がある。

4) 『諸国居城図』『甲府城下』（尊敬閣文庫蔵絵図）

『諸国居城図』は、加賀藩軍学者有沢永定が17世紀後半から18世紀初頭（元禄年間頃）に編纂した絵図集である。「甲府城下」の愛宕山部分に石取場という記載がみられる。

5) 石碑銘文（『園記』碑）

大正11年（1932）に建立され、現在も当該地に残る石碑の銘文（全256字）に文禄2年（1593）に国主浅野長政が府中城（甲府城）を築き、その時付近の社地の岩石を採った遺跡であることが書かれている。

「(中略) 文禄二年国主浅野長政築府中城也堀鑿近傍社地之于岩石而営山荘者即其遺跡也 (中略)」

近代になると製糸場を営む甲府市八日町66番地の大木善右衛門の別宅「愛宕山荘」として利用されるが、明治38年（1905）3月に創設された歩兵49連隊（甲府連隊）の連隊長

公舎として、昭和13年(1938)頃まで使用され、大木善一郎に返還される。その後、甲府地方裁判所所長宿舎となるが平成15年(2003)に移転した。

その後、土地を管理する財務省甲府財務事務所より建物撤去についての事前協議があり、平成19年(2007)に埋蔵文化財の確認調査を実施した。その結果、2箇所を設定したトレンチでは、池からの湧水が見られたが、多量の安山岩の割殻が確認されたことにより石切場の痕跡が明らかになった。庭園内に露出する安山岩には加工痕のある石材11石が、また23箇所の矢穴を確認した。矢穴は最大約8cmのものが確認され、これは甲府城銅門付近に認められるものと同じ規格である。また幅が概ね約二寸(5~6cm)の規格のものもある。これらは敷地東側の池周辺で多く確認されており、池の北側の巨大な岩石には6箇所に及ぶ矢穴が認められ、池そのものが石取場の跡であったことが理解できる。なお、これ以外にも大正期以降と考えられる削岩機等の痕跡やセリ矢の矢穴のある石材も確認され、江戸時代以降も継続的に採石されていたことが窺われる。

城内の石切場はよく知られているところであるが、愛宕山一帯には本地とは別に残石の分布や石取の跡が数カ所確認されている。また同じ岩脈の広がる武田の杜のある山宮町一帯にも残石の分布が認められ、石取の歴史は痕跡として把握することができるが、継続して採石されているため最終的な姿であることから、初期の歴史を追うことが困難であるという課題がある。

5) 甲府城下町

城下町は、甲府盆地北部に発達した相川扇状地の扇端部に位置する。戦国期に武田氏の城下であった武田城下町を組込み、比高30mの一条小山に築かれた甲府城を中心に形成され、東西1.7km、南北2.5kmの範囲に広がる。

町場としての起源は、鎌倉時代に一条小山にあった一蓮寺の門前町にまで求め得る。戦国期、武田氏は一蓮寺門前町周辺に八日市場・三日市場を設置するほか、長禅寺宿・善光寺門前町・長延寺(現光沢寺)寺内町など城下南端を市町が集中する商業地区として位置づけていた。天正9年(1581)、新府城(韮崎市)への移転及び翌年3月の武田氏滅亡に際し、城下の荒廃を伝える資料は見出せず、町場は存続し続けたものと推量される。

武田氏滅亡後に建設された近世都市「甲府城下町」は、国主の住まいと政庁を兼ねた甲府城を中心に、内郭の武家地、外郭の町人地が同心円状に広がる。さらにその外縁を取り囲むように多くの寺社が配置され、飛躍的に拡大した都市規模を有するとともに、国主を頂点とする身分制度が城下町の構造に反映された新しい都市空間へと移り変わった。また、内郭を土塁と二の堀、外郭を土塁と三の堀により区画し、城防衛の最前線とする「総構え」の手法も武田氏時代にはみられなかったものである。

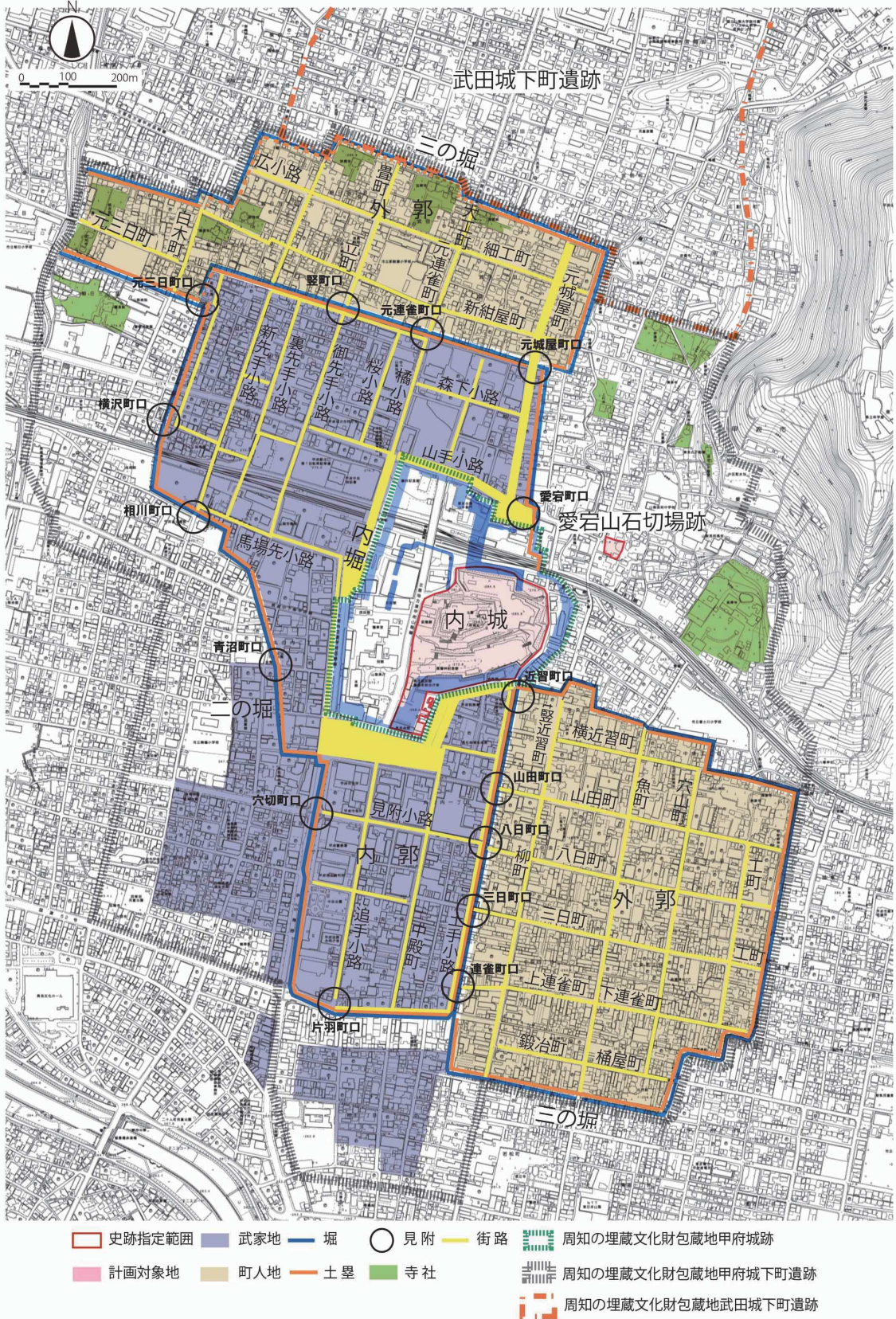
内郭の武家地は、追手(大手)小路・橘小路・先手小路などを機軸とした長方形の街区が設けられ、外縁部は城門を配した15の見附けにより外郭へと通じる。

外郭の町人地は南北二つに分かれ、北側一帯の上府中(古府中)は武田氏時代の町人地の大部分を取り込み、南北5筋・東西3筋の街路により形づくられた長方形の街区に中世の名残をとどめている。一方新たに建設された南側の下府中(新府中)は、南北4筋・東西6筋の街路により碁盤目状に整然と区画されている。また、往来の盛んな甲州道中が通過する下府中には、武田氏時代の有力商人居住地であった柳町・連雀町・三日町・八日町が移転され、最も賑わう中心街となる。

城下町外縁に配置された寺社の多くは、城下町建設に伴って移転・創建された由緒をもち、今なお江戸期以来の地に位置し、法灯を伝えている。『甲斐国志』は築城・城下建設にともない多数の寺社の移転を伝えるが、「文禄中」、もしくは「文禄中、浅野氏の時」とする伝承が多い。城郭や城下は浅野長政・幸長父子により整えられたと考えられるが、寺社の移転を慶長年中や元和年中とする伝承もあるため、慶長5年(1600)、徳川家康領有後もなお城下の整備は続いたと推定される。

宝永元年(1704)、柳沢吉保・吉里の甲斐領有により多数の家臣団が移住した城下は大きな賑わいをみせることとなる。町名変更のほか、家臣屋敷の配置にともなう内郭整備、郭外への新たな武家地新設など城下町の拡大・再整備が実施された。江戸期を通じ柳沢氏領有期に最も拡大・整備された城下は、享保9年(1724)、同氏の大和郡山移封により、空屋敷の払い下げなど武家地整理が進められた。同12年(1727)の大火により旧観を失い、以後、幕末にいたるまで城下規模・形態に変化なく明治維新を向かえることとなる。

明治6年(1873)には内郭諸門の撤廃、同8年(1875)は二の堀埋め立てにより旧武家地の市街地化が進められ、かつての堀・土塁はわずかに水路や土地区画にその名残をとどめることとなった。甲府城下町は近世をつうじ甲斐国の政治・経済・文化の中心を占める都市であり、今なお、中心都市としてその位置づけは現代に至っても変化ない。



甲府城下町の空間構成図